

マタイによる福音書6章1-8節 「御父に見せる義」

1A 人に見せる義 1

1B 心の隠れた動機

2B 天の父からの報い

2A 施し 2-4

1B 偽善者たち 2

2B 左の手に隠れた施し 3-4

3A 祈り 5-8

1B 偽善者たち 5

2B 奥まった部屋での祈り 6

3B 同じ言葉を繰り返す祈り 7-8

本文

マタイによる福音書 6 章を開いてください。私たちの山上の説教シリーズの学びはついに、次の章に入ります。今日は、1-8 節まで見ていきます。「1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けられません。2 ですから、施しをするとき、偽善者たちが人にほめてもらおうと会堂や通りでするように、自分の前でラツパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。3 あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。4 あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見られるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。5 また、祈るとき偽善者たちのようであってははいけません。彼らは人々に見えるように、会堂や大通りの角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。6 あなたが祈るときは、家の奥の自分の部屋に入りなさい。そして戸を閉めて、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたところで見られるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。7 また、祈るとき、異邦人のように、同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことば数が多いことで聞かれると思っているのです。8 ですから、彼らと同じようにしてはいけません。あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。」

私たちは、5 章 20 節から始まる、イエス様が語られる義について見て行っています。「5:20 わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」パリサイ人と律法学者の義にまさる義について見て行きました。それは、自分自身が行なって得ることのできるような義ではなく、もっぱら神からの義、神の義を追い求めなければいけないこと。そして、心の内側を変えていただけなれば

何もすることができないこと、つまり御霊の新生によって、聖霊の力によって初めて行うことができることを学びました。

そして 6 章では、キリストの弟子として生きる時に、大きな二つの要素をイエス様が教えておられます。一つは、「霊的な奉仕」あるいは「神への献身」です。霊的な奉仕について、1 節からユダヤ人たちが神に奉仕する時に行なっていたこと、施し、祈り、そして断食があります。キリスト者もこれらをするように勧められています。そして、「世にある財産に対する態度」です。キリスト者は財産を持たず、世捨て人のようになるようには教えられていません。世にあって生きるように教えられていますが、そこにある富に対してどのような態度を取るべきなのか？を見て行きます。

そして、6 章に貫かれているのは「報い」です。報い、すなわち何かを行なうことによる対価です。天の御国において報いがあるかどうか？ということでもあります。私たちはとかく、「報いのために物事を行なってはいけない」と言います。いいえ、人間というものは、神によって報いを受けるように造られています。その一人一人が行なったことに対して、神は報いを与えられます。その、神の与える報いではなく、人からの報い、物による報い、あるいは神ご自身であっても、自分が神によく見られようと努力することも含め、異なるところに報いを求めるので、報いを求めることがおかしくなります。しかし、自分が行なっていることの報いという、神から与えられている自然の期待や希望を、どこに求めて行くのかを私たちはこの章でじっくりと学ぶことができます。

1A 人に見せる義 1

1B 心の隠れた動機

1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けられません。

この「善行」は「自分の義を行う」というのが直訳です。ユダヤ人の間では、善行として、あるいは義の行いとして、三つの具体的な行為が奨励されていました。それは施しをすること、祈ること、そして断食をすることです。2-4 節までが施しについて、5-15 節までが祈りについて、16-18 節までが断食について書いてあります。ユダヤ人にとって、また神の御言葉において、義というのは抽象的なものではなく、何か不平等や不公正があるならば、それを正す具体的な行いとして現れます。悪者がいれば、神は罰せられます。そして貧しい者がいれば、持っている者は分け与えます。そこでここでは、義の行いが施しをすることとして現れています。律法には、貧しい者への施しを主は強調されていますが、ユダヤ教ではこれを熱心に行います。

けれども、パリサイ人は外の行いに注意はしていたものの、内側の姿勢については律することはなかったことを私たちは 5 章で学びました。そこで出て来る動機というのが、「人に見せる」ということなのです。イエス様が言われました、「ルカ 16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人々の前で自分を正しいとするが、神はあなたがたの心をご存じです。人々の間で尊ばれるもの

は、神の前では忌み嫌われるものなのです。」これらの善行は、キリスト者の間でも奨励されるものです。そういった義の行いでさえが、自分の心を貧しくするのではなく、どうしても自分の心を肥やそう、太らせようとして動くことがあるのです。

「天におられるあなたがたの父」とイエス様は呼ばれます。イエス様は 5 章 45 節から神を「天の父」と呼び始めておられます。そしてこの 6 章では、ずっと「天におられる父」と言い続けておられます。旧約聖書には確かに、神がご自身を父であることを明かしているところがあります。出エジプト記 4 章 22 節に、「【主】はこう言われる。『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。』」とあります。けれども、ユダヤ人はそこまで人格的に、親密に神のことを語りませんでした。しかし今は、キリストにあって、御霊によって私たちは、神を父と呼ぶことができるような関係を持っています。「ロマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」

2B 天の父からの報い

そしてイエス様はここで、「報い」について話しておられます。報いというと、仕事をしてその対価としての報酬、賃金のことを考えてしまいます。もちろん、主のしもべとして仕えることによって、主が喜びの冠を私たちに授けてくださいますが、ここでは父なる方が報いを与えられることについてイエス様は話しておられます。つまり、ここでの報いとは「やりがい」と言い換えることができるかもしれませぬ。父である方が私たちのしていることで、私たちが快く受け入れてくださる、と言ったほうが良いかもしれませぬ。

人間というのは、動機付けがなければ何事もできない生き物です。チャック・スミス牧師が、かなり前に中国政府から招聘を受けて、教会で説教の奉仕を頼まれました。1980 年代のことですから、今よりもはるかに監視が厳しい時代でした。共産党の監視下の中で行っていたのでかなり制限がありました。役人の人たちに次のようなことを話したそうです。「共産主義は、その制度自体、機能不全に陥るものを含んでいます。動機付けがないからです。どんなに働いても、その労働に対する対価を示していません。人間には、二つの動機で労することができます。一つは愛、もう一つは金です。」とのこと。例えば日本においても、学校や病院など数多くのものが宣教師によって創設されました。彼らは愛の動機でそれだけのことをすることができたのです。けれども同じように、お金の動機によっても数多くのことが成し遂げられます。対価あるいは報いは、必ずしもお金だけではなく愛もあるのです。

ですから、イエス様がここで語られているのは父子にある人格的關係にある報いです。ですから大事なものは「心の動機」です。主が私たちに終わりの日に称賛を与えてくださる時、その心のはかりごとに従って与えてくださいます。「I コリ 4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごともしっかりにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」パウロは、コリント

第二 5 章 14 節においては、「キリストの愛が私たちを捕らえているからです。」と語っています。愛が神への奉仕の動機付けとなります。

2A 施し 2-4

1B 偽善者たち 2

2 ですから、施しをするとき、偽善者たちが人にほめてもらおうと会堂や通りでするように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。

人にほめられようとして施しをしている人々をイエス様は、「偽善者」と呼ばれています。ギリシア語では、舞台に立つ役者のことを指しています。仮面をかむって演じる役者のことです。つまり、実際の自分よりも良く見せて、人を相手に行動することを意味しています。「人の評価」を気にしている姿です。

これが奉仕について、私たちがしばしば陥る罠です。主に対して奉仕をするのではなく、人を相手にして奉仕をしていることがしばしばあります。天におられる父と、親密で、個人的な関係において、この方に喜んで、愛をもって仕えているところが、なぜか周りの人々を喜ばせることのほうに神経を使ってしまう。そうすると、心が渇いてきます。外側の奉仕はしっかり果たしているのに、内面が満たされていません。いつか疲れ果ててしまいます。そして外で行なっている奉仕が終わると、まるで仕事を終えたようにまるで違った個人生活を送ります。「えっ、教会ではこんなに霊的に見えるのに！」と思われる人が、家ではまったく別のことをしています。すべては、天の父からの愛ではなく、人を相手にして行動しているからです。

「彼らはすでに自分の報いを受けているのです。」とイエス様は言われましたが、いかがでしょうか、私が説教をして誰かにほめられます。「明石先生のメッセージは素晴らしいですね！」私が、「うーん、気持ちがいい！」とその褒め言葉を神に栄光を帰さないでそのまま受け入れます。そうしたら、その「メッセージは素晴らしいですね！」と言っている言葉が報いとなってしまう、天には残されていないのです。なんと空しいことでしょうか！人の称賛は空しいです。称賛していた人は、数週間後にはその人の存在さえ忘れてることがあります。すぐさま非難にさえ変わりえます。

私たちが同じ働きをしても、報いが異なることをパウロが、コリント第一 3 章でこう語っています。「I コリ 3:12-13 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。」イエス様が戻って来られる時に、私たちの働きの真価が火によって試されますが、その材質の違いは、天におられる父との交わりの中で行われたのかどうか、神を愛し、この方に仕えるという動機だったのかどうかで量られる、ということです。

2B 左の手に隠れた施し 3-4

3 あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。4 あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見られるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

イエス様はこれから何度も、「隠れたところで行ないなさい」と命じておられます。これは、あえて善い行ないを隠しなさいということの意味していません。イエス様は、「マタ 5:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。」と言われましたね。ですから、人々の前で行なう良い行ないがあるのです。ここでイエス様が言われているのは、「隠れたところだと、如実に自分の本当の姿が表れる。」ということです。英語ですと"character"という言葉があります。「品位」と訳したらよいでしょうか、「真実の姿」と言えばよいでしょうか、誰も見ていないところで自分が何をしているかによって、それが本当の自分を表している、というものです。

3A 祈り 5-8

1B 偽善者たち 5

5 また、祈るとき偽善者たちのようであってははいけません。彼らは人々に見えるように、会堂や大通りの角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。

善行だけでなく、祈りもユダヤ人たちは熱心に行なっていました。一日に二度、ユダヤ教徒はシェマーを唱えます。申命記 6 章にある、「申 6:4-5 聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。」を唱えます。朝に、また夜に唱えました。それから、シェモネ・エスレという祈りもありました。18 を意味する言葉ですが、実際には一つ加えられて 19 の祈りです。これを一日に三度、午前 9 時と、正午と、午後 3 時に唱えます。ペテロやヨハネも、午後 3 時の祈りのために宮に上って行ったと書いてあります。しかし、その神に対する祈りですら、人々に見えるために行なってしまいました。

2B 奥まった部屋での祈り 6

6 あなたが祈るときは、家の奥の自分の部屋に入りなさい。そして戸を閉めて、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたところで見られるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

イエス様は、隠れた所での祈りを勧めます。家の奥の誰も見ていないところで、その部屋で祈ったら、その祈りに対して父なる神が報いてくださいます。このようにして、父なる神との親密な交わりを持つことができます。もちろん、これは再び公に、人に見える形での祈りを否定するものでは

ありません。そうではなく、人に見せるためのものなのか、父なる神に語りかけているものなのか、はっきりと分かるリトマス紙だということです。もし、私たちの祈りが人前ではよく祈れて、独りで祈る時は乏しくなってしまうのであれば、それは自分の心を調べるべきでしょう。主との親密な交わりが希薄になっている証拠です。

3B 同じ言葉を繰り返す祈り 7-8

7 また、祈るとき、異邦人のように、同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことば数が多いことで聞かれると思っているのです。8 ですから、彼らと同じようにしてはいけません。あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。

隠れたところで祈りなさい、という命令に加えて、主は祈りについてさらに教えられます。まず、「異邦人のように祈るな」と言われます。異邦人の祈りとは、その祈りの対象がまことの神ではない神々、偶像であるわけです。したがって、「玉をたくさん打って当てる」というような、非常に不安定で、無力な神のことを表しています。ここでの過ちは人に見せることではなく、神ご自身に自分の祈りを見せている、神に印象付けているという過ちです。

預言者エリヤとバアルの預言者の対決を思い出してください。バアルの預言者は一日中祈り叫んでいました。踊り、また身を傷つけていました。けれども答えはありません。エリヤの祈りは端的で短いものでした。「I 列王 18:36-37 ささげ物を献げるころになると、預言者エリヤは進み出て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、【主】よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私がおなたのしもべであり、あなたのおことばによって私がこれらすべてのことを行ったということが、今日、明らかになりますように。私に答えてください。【主】よ、私に答えてください。そうすればこの民は、【主】よ、あなたこそ神であり、あなたが彼らの心を翻してくださったことを知るでしょう。」それで、天から火が降って、いけにえが焼き尽くされたのです。

まことの神は、「父」と呼ばれるとおりの人格のある方です。祈りは、人格のある存在への対話であります。私たちは、誰かに対して、意味もなく名前を呼ぶでしょうか？いいえ、違いますね。イエス様は、「あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。」と言われています。神が知識不足、情報部族だから私たちは祈りでそれを知っていただけではありません。あなたがお父さんであることを考えてください。小さな息子が何をしているか、実は知っています。けれども、それを自分に明かしてくれることを願っています。神はそのような方です。私たちが自分の心を明かしてくれることを願ってやまないのです。

今回は、そこでどのように祈ればよいか、主ご自身が指導して下さるところを読みます。